

2017/7/30

韓国における民族主義の歴史的考察

劉仙姫（帝塚山大学）

・本研究の目的

韓国民族主義の本質を国際関係論的観点からとらえる。

→冷戦変容期における韓国民族主義と、大国を中心とした国際政治の現実が1970年代の韓国の対外政策に与えた影響を考察

・韓国民族主義の起源＝朝鮮の開港、東学運動、3・1運動

共通点 i) 対内的に資本主義的萌芽と、政治権力に対する民衆的抵抗が封建制を瓦解させた

ii) 対外的には西欧諸国の門戸開放の要求が行なわれた一連の過程（自主問題）

韓国民族主義の必須的な構成要素 i) 民族正体性の認識と民族自尊の高揚
ii) 反帝國的・反封建の民衆主義の出現
iii) 自主独立の意思と運動力

1. 朝鮮末期に見られる韓国民族主義

1) 朝鮮末期の指導層の特徴は、民族主体性の欠如と事大主義根性である？

i) 事大主義：（文化的、倫理的観点）国際面における儒教的家族主義

（国際的観点）冷徹な現実主義的外交政策¹

ii) 朝鮮半島のような地政学的な与件下で事大主義的な国防政策をとらざるを得なかった。

事大：大国が小国を力で隷属させる状況下で、小国が大国に依存し保護を受ける意味（×）

力よりはその権勢の基礎となる文化的、倫理的な調和および徳化なしには不成立。

世界平和のための同盟や国際協力に近い概念²

2) 外部からの文化的刺激や接触から民族的アイデンティティの意識を形成

＝民族主義は最初の意識的な国際化の言説である³。

→東学 i) 1860年に民間信仰を基盤に、仏教や儒教もとりいれ、西学に対抗。

ii) 基本思想：人間の尊厳および主体性を求める反封建的民衆意識を反映

iii) 儒教的な言辞の上に、「倭賊」や「洋賊」に対する対抗意識（ナショナリズムの萌芽）

3) 朝鮮は列強が衝突するパワーゲームの場として、主体性を急速に喪失していく

→米朝条約（1882）第一条の周旋条項について、朝鮮は主権と独立を保全するために米国が武力を使ってでも朝鮮を保護してくれるという公約と誤解（咸秉春）

¹車基壁『韓国民族主義の理念と実体』가치, 1978、143頁

²咸秉春『韓国の文化伝統と法 - 葛藤と調和』韓国学術研究所、1993、321頁

³アンドレ・シュミット著、糟谷憲一、並木真人、月脚達彦・林雄介訳『帝国のはざままで - 朝鮮近代とナショナリズム』名古屋大学出版会、2007、4頁

→高宗は危機が訪れる度に米国の助力を要請

→朝鮮の米国に対する傾斜は、列強の力を借りることにより、朝鮮の独立維持を試みた
／列強の角逐という現実を前に、信義に基づく大国への期待と大国批判

5) 国際政治観に示された道徳と権力⁴

・開港期以後にも朝鮮の国際政治観は儒学の道徳・権力観念の影響

＊兪吉濬：国家間における法規範が平等に適用され道徳が実践される国際社会を想定
(万国平等論)。強大国の権力行使に対する道徳的批判。

⇒日清戦争以後、特に日露戦争を経て日本の帝国主義的膨張が顕著化

→規範よりは権力を国際政治の動力として見る国際政治観が示される。

・西勢東占の国際現象と開放化の現実直面し、権力を国際政治の動力と見る視覚が成立。

i) 朴珪壽：孤立無援を抜け出すためには開放が必要であり、安保不安を克服する方法としては富国強兵と共に、友好国家との連帯協力(同盟)が想定された。

ii) 朴泳孝：国家の自律自存の力を養成するための改革の根本倫理として道徳を強調

・朝鮮王国建国以来、支配イデオロギーとして重視されてきた儒教的民本主義

=民本を基礎に置いて内政と儒教的教化の充実を図れば、侵略されることはなく、軍事力増

強は民本主義に反するものであり、軍事力は防御するに足る最小限度のものでよい⁵。

・儒教的政治秩序=現実性の原理に基づく政治+当為性の原理に立脚した倫理⁶

=自らを「禮義ノ邦」と自認する自意識は国際関係を規律する禮が小国の存在根拠として
内在化され、自らの存在方式を正当化する規範になっていることを意味。そして、信義
は権力の脆弱性を補完する小国の生存根拠として、名分としての性格を強く帯びる。

=道徳と権力の間で規範を強く意識する理由は道徳的性向のみならず、それ以上に強大国
と弱小国の権力配置のなかで自立と生存を模索する外交を考える政治感覚も作用した結果。

2. 植民地化過程と植民地下における韓国民族主義

1) 朝鮮末の外勢に対する民族の抵抗を支えた3つの思想

=民族保全、自主独立を志向／国内政治が国際環境に制約されるなかで自主と依存の混在

i) 衛正斥邪思想：日本・西欧列強に対する自主性^㉞、中国の支配権力に対して依存

ii) 開花思想：中国の支配権力に対して^㉟、日本を含めた西欧列強に^㊱

iii) 東学思想：日本を含めた西欧列強に対する自主性最強

→義兵運動、愛国啓蒙運動、そして東学運動の間の非協力的状況(←思想の外在的な要因)

⁴장인성 『近代韓国の国際観念に見られる道徳と権力』ソウル大学出版部、2006

⁵小川原宏幸 『伊藤博文の韓国合併構想と朝鮮社会 - 王権論の相克』岩波書店、2010、42頁

⁶韓興壽編 『韓国政治動態論』오름,1996、484頁

2) 1901年に米大統領に就いた Theodore Roosevelt

- i) 極東での米国の地位が露の南下政策によって脅かされると認識し、露を抑制すべき国である日本が韓国を必然的に手にすべきであると考えた。
- ii) 極東・太平洋地域でのより安定した国際秩序の実現を図り、韓国が無力な平和主義であるために極東においてさまざまな紛争が発生したと認識
- iii) 国レベルの相互主義を実行できる力のある国だけが他国の友情に頼る資格がある
- iv) 日本との関係を優先させ、日本との関係を損なうような形で朝鮮問題への介入回避→米国政府の対応（現実主義的）⇔韓国側からすれば、米国の行動は「裏切り」と映った。

3) 「3・1独立宣誓書」←民族自決主義が朝鮮独立運動に及ぼした影響

- *民族自決主義：すべての被支配民族の独立を想定したものではなく、その独立が世界の平和にとっても米国にとっても有益であると判断した場合、完全独立を承認する

4) 申采浩の歴史観

- i) 民族主義史学：帝国に締め付けられた民族にとっての自律性を作り出し、朝鮮を中国中心の世界から引き離し、日本への独特の抵抗を可能にする
- ii) 列強による弱肉強食の世界→自強策の方便が民族的主体意識の強化、愛国心の喚起

3. 解放以後の韓国民族主義

- 1) ルーズベルト (Franklin D. Roosevelt) 大統領はカイロ宣言に「朝鮮の解放」の文句を盛り込むことに賛成/解放後の朝鮮が独立国を維持していく能力に対して懐疑的
→戦後世界体制構想の一環として信託統治案（強大国政治の副産物）⇔独立を望む韓民族
→朝鮮半島の分割占領（米ソの軍事的便宜による 38 度線）
⇔韓民族の意思とは関係なく、米ソ両大国の現実主義的葛藤の所産

- 2) 米軍は 45 年終戦と共に進駐し、左翼勢力の制圧と国家樹立に際して主導的役割を遂行/韓国は米国との関係を最も重視し、安全保障と経済援助を確保（韓国の対米従属関係）
→車基壁；（朝鮮一開国時の明）韓国一独立時の米国による支援に対する恩恵意識
→過度な恩恵意識は民族の自主意識の成長を妨げ、政権が国民の支持よりも外勢の是認ないし支援の獲得に力を注ぐようにする危険性がある。

- 3) 李承晩政権：北朝鮮の共産主義は反民族的で反民主主義的であるため、これに対抗する韓国の政権が反射的に民族的で民主的な政府であると主張。

- より積極的な民族主義をかかげる必要性によって「一民主義」を提唱
=単一民族の血統を強調し、「別れることで死に、一で生きる」と政権維持を図った。
*「民族主義」は、「反米主義」であり「容共主義」という認識が一般化され、「共産党が浸透し利用する政治用語としての不信」の対象となり、「国家」や「国民」という用語を使用 → 朝鮮民族ではなく韓国という国家を対象とする新たなナショナリズム

4. 朴正熙と韓国民族主義

1) 朴正熙は、北朝鮮との体制競走のなかで民族史の正統性を確保し、反共による勝共統一を成就するために近代化を推進（「上からの民族主義」）

→朴政権の正統性の根拠：3・1の独立精神、4・19革命

* 儒教的政治観 i) 忠孝のような垂直的価値と国家主義的な価値を重視

ii) 大義名分を重視：韓国ならではの「メンツ」という概念（威信）

2) 執権初期から、「経済自立こそが平和統一への道」と述べており、「先建設後統一」戦略

①63年8月、『国家と革命と私』の中で自らの対米観を披歴

= 「民主主義の理想と経済援助への献身的意欲を評価するものの、これを通じて韓国社会の一律的な米国化を期待してはならない。軍事経済面における米国の援助はいっそのこと我々の意に沿って与えて欲しい」

> 民族主義の基本要素である自主と主体性、そして外勢に対する独立への意志

②『わが民族の進むべき道』の第2章「わが民族の過去を反省する」

= 朴正熙は主体的な歴史意識を基本に、朝鮮半島の政治史を現実主義的にアプローチ

i) 高句麗の進取的気概と広大な領土

ii) 高麗、妙清の乱（高麗時代、お坊さんの妙清による金国の征伐と西京への遷都論が開京の貴族たちの反対によって挫折した後に起こした）以後の金富軾の対応を批判

iii) 朝鮮朝が始まり、儒教の国教化を早急に施行したため、民族史的展望を欠如した結果、事大主義、形式主義、そして身分制度の強化につながったと批判（←申采浩）

③朴は民政参与と共に63年10月15日に実施された大統領選挙のために行なった遊説で「民族的民主主義」を主張（自主と自立に基づく近代化と民族中興の課業を成就することで究極的に民族の自由と繁栄を追求する）

④63年12月の大統領就任時に政治的自主と経済的自立に言及

3) 「自立経済」達成という言葉で、経済成長＝経済近代化の目標として挙げる（1965年頃）

* 日韓条約反対運動→自らが「反日」とであると強調し、より次元の高い自由陣営の結束のために、過去の感情に執着することなく大局的見地において賢明な決断を国民に迫る。

→67年第6代大統領選挙における「民族的民主主義」の一次的目標が経済的自立であり、自立こそが民族主体性の立てられる基盤であると強調。

4) 68年頃、「自主国防」とセットにされる

→70年代、「自立経済と自主国防」の確立が主張され、重化学工業化への道が「経済近代化」

= 「自立経済」建設に、また直接的には「自主国防」に、大きな位置を占める。

* 安全保障観：勢力均衡の変化とその変化が北朝鮮の武力挑発をそそのかす。

> 韓国が現実的に周辺4大国の対朝鮮半島戦略を変化させ得るような十分な軍事力と外交力を保有していないなかで、現状維持を望む

→「自主国防」は米国への軍事的依存と矛盾するものではなく、むしろ「反共」の基地と

しての韓国の自由主義陣営における位置を強調

→独自の核保有可能性を検討

5) 米中接近

① 緊張緩和は列強の新たな問題解決方式にすぎず、中小国を犠牲にする大国の論理

② 韓国民族主義を反映させた外交＝自主統一を強調し、南北当事者間の直接協議を強調

→民族統一が「民族の歴史的使命」として浮き彫りにされる。(←「7・4南北共同声明」)

i) 南北は自主的で平和的な方法で民族大団結を図るという3大統一原則に合意。

ii) 「自主」：強大国の強要や干渉を受けずに、統一問題を南北が自主的に解決。

*統一は民族内部の問題であり、民族固有の課題であるが、分断持続の原因の中に朝鮮半島周辺の政治力学が全く介在していないと断言しにくい(咸秉春)。

→10月維新は、(国際環境の変化を理由に)正しい歴史観と主体的民族史観に立脚して、民族の安定、繁栄、そして統一を国民の力によって達成することを究極的な目的に設定

6) 韓国固有の歴史と伝統を強調(文化的民族主義を追求)

i) 檀君、高句麗の気概、新羅の花郎精神、世宗と李舜臣に対する賛美

ii) 民族主体性の確立という名分で強化された国史教育

iii) 列強の侵入を前に東学が民族的主体精神をその思想の核心にしていると強調

iv) 申采浩を称賛(民族史観の確立)

*咸秉春

i) 国際関係の大原則：各国の国益の極大化⇔韓国：国際協力を倫理化し、信義を重視

ii) 国家間関係は現実的な関係であり、上下関係ではなく対等な関係である。

iii) 今日の国際秩序は「力」の秩序であり、力が正義である。

おわりに

・韓国民族主義は現実主義的アプローチの所産であり、当初から現実主義的な要素を十分に含んでいた。／韓国において無政府性を前提に権力政治という観点から国際政治を分析する理論としての現実主義は、国際政治のマイナスの意味を帯びて用いられた。韓国に見られる国際政治観は合理的というよりは感性的であり、現実主義的であるよりは道徳主義的な傾向が顕著である(←儒教)。

→70年代の韓国には政権の正統性と体制強化のためにナショナリズムのいちじるしい高揚

↑米国の新たな大国外交と朝鮮半島を取り巻く大国間の力関係の変化

→朴政権にとっての韓国民族主義は対内的に国家統合を、対外的に自主韓国を追求

→「現実主義的な民族主義」：力の原則に基づいて韓国民族主義を再調整しようとした試み
朝鮮半島問題が諸大国によって決定されるという現状の改善と韓国の自主性を増大(←東方外交)
富国強兵(自立経済、自主国防)